

## あ と が き

久保浩一

読書の秋とはいうけれど、何となく読書といえば夏というイメージがあるのは、集英社の「ナツイチ」の宣伝効果、並びに後述する『異邦人』が原因なのかもしれない。20年程前、書店を巡っていると、タレントの広末涼子さんが表紙を飾った集英社の小冊子が並んでいたことを思い出す。その小冊子には、多くの文庫本が掲載されていた。そのなかでも、とりわけ興味がわいた、リチャード・バック氏著『ONE』を購入した記憶がある。同氏は『かもめのジョナサン』の著者である。

というわけで、今回は読書、或いは本にまつわる話である。最初に断っておく。また個人的な話になりそうだ。

平成29年初春、知人が末期癌で入院し、一カ月程で亡くなった。この知人とのやりとりは、全青司ひろしま全国研修会第6分科会を担当したとき、本分科会のPR文に書いたので、ご存知の方がいるかもしれない。参考までに後掲しておく。

その知人こと甲さんが入院中の或る日、私が乙さんと一緒に見舞に行くと、甲さんの枕元に『聖の青春』という本が置かれていたことがある。広島出身の将棋棋士である村山聖氏を題材とした小説である。分厚い文庫本であった。

甲さんと付き合いがあった或る人が見舞に来た際、置いていったのだという。末期癌という状態の甲さんに分厚い文庫本を一頁目から読めと？「残酷なことするなあ」というのが第一印象だった。

もしかしたら、最近になって読書に目覚め、読書万能主義の立場から甲さんを救おうとしたのかもしれない（「読書万能主義」という言葉があるのかどうかは知らない）。得意になって薦めた本を甲さんに読んでもらうことによって、感動を湧き上がらせ、迫りくる死の恐怖に打ち勝ってもらおうとでも？

本を贈るという行為が、危機に陥った相手との関係性を構築するための雑多な面倒事を回避する簡易な仕方という場合もあるだろうし、敢えて言うけれど、多少なりとも自己顕示欲の発露ということではなかったのか。

一冊の本が人生を変えるということはあるのだろうし、もしかしたら、私の理解できない事由があるのかもしれない。

甲さんは、その文庫本の贈り主とその関係者に対して「ドライやなあ・・・」と悲しそうに独り言ちることが何度かあった。その言葉にすべての思いが含まれているように感じたし、実は「あっ」と驚く贈った側の意図があったのだ、というのはミステリ

一作品の中だけで十分である。

そういえば、大学時代の恩師H先生が、その恩師から「書に淫するなかれ」という言葉をいただいたことがあるそうだ。最初、H先生はその言葉を文字通りに受けとり、「書齋の中に籠ってばかりいてはいけない、今で言う社会貢献にも尽力するように」と受け取られたらしい。

しかしながら、その言葉は、人から「書に淫するなかれ」と言われるくらいがむしろに書に没頭している人に向けられた言葉であり、最初から書に埋もれたことがない者には無縁の言葉であったと気づかれたとか。「気がつくのが遅すぎた」と悔やまれたらしい。

H先生の名誉のために言っておく。H先生は『狐物語』を中心とした中世フランス文学の権威である。数多の業績を限られた紙面ですべて記すことはできないが、昭和59年フランス碑文文芸アカデミーよりラ・グランジュ賞受賞、平成2年フランス政府より教育功労勲章シュヴァリエ章受章、平成16年にはフランスAydat町の名誉町民にもなられた研究者である。今までの研究業績と没頭された書の数は我々凡人が想像できるところではない。

にもかかわらず、H先生は、どこかしら飄々とした様子で在学生のみならず卒業生にも慕われており、学生の冗談などにも寛容であった。誰もが認める学問業績に裏打ちされた知性と寛容的態度は「学者とはかくあるべし」という師表にも思われた。

発想は素寒貧、気の利いた意見も出せない銜学趣味的読書自慢とは次元が違うのだ。

話を戻そう。『聖の青春』の贈り主が字義通りの意味で「書に淫している」のかどうかは知らないし、正直なところ甲さんが亡くなった今となってはどうでもいいことだと思ったりすることもある。

しかしながら、かく言う私も本を贈ったことがある。二年半程前のことである。地元呉を旅立ち、県外で新たな生活を始めることになった甥に贈ったのは、道尾秀介氏著『鬼の跫音』とアルベール・カミュ著『異邦人』である。

この贈り物には私なりの意図があった。新生活に慣れ始めた6～7月頃、読みやすいミステリー短編集である『鬼の跫音』で読書の楽しみを覚え、盛夏に『異邦人』を読めばよいのではないかと思ったからだ。現代日本のエンターテインメントから、いきなり『異邦人』とは飛躍が過ぎるかなと思いましたが。

『鬼の跫音』の中では、『冬の鬼』がとりわけ印象深く、谷崎潤一郎著『春琴抄』のイメージと重なった。また、『異邦人』は太陽が強烈に照り付ける暑い夏の昼下がりに読むことを勧めたい。読んだことがある人には、その意図がなんとなくわかってもら

えるだろう。

さて、肝心の甥のことである。私が贈った小説は未読であり、本というものをほとんど読んでいない様子である。さもありなん。

---